

私はあなたを忘れない

安中市立第二中学校

三年 新井 千寛

皆さんは認知症という病名を耳にしたことはありませんか。認知症とは脳の病気や障害により、記憶や判断力などの認知機能を低下させ、日常生活に支障をきたす状態のことを指します。そんな認知症患者の数は六十五歳以上の高齢者の内、五人に一人が発症していると言われていきます。

ここで皆さんに質問です。皆さんの身近な人が認知症になってしまったらどう思いますか。そして、今までと変わらず接していくことができますか。身近な人に起こり得る病気だからこそ、私達は真剣に向き合うことが必要です。

では、なぜ私がそう考えるのか、体験談をお話します。

私が小学三年生のとき、祖母が認知症と診断されました。物忘れが増え、手先が器用で毛糸を使った髪

留めをよく作ってくれていましたが、編み方を忘れてしまい次第にぼんやりとする時間が増えていきました。

当時幼かった私は「認知症を発症すると一瞬で全てを忘れてしまう」と考えていましたが、私の両親が介護職ということもあり、認知症に対する正しい知識を覚えていきました。それと同時に祖母の認知症も進行していきました。

祖母が認知症を発症してから四年、私が中学1年生になり、

「可愛らしい、あなたにあったお名前だね。一生大切にするんだよ。」

そう褒めてくれた私の名前を祖母は忘れました。

「祖母の中に居る『私』は一体誰なんだろう。」

そう考えると心が不安でいっぱいになりました。

そんな祖母が私を喜ばせようとお年玉をくれました

た。その日は気温が三十度を超える八月の猛暑日でした。祖母にお年玉を返し、今は一月ではないことを伝えると、

「ごめんね、おばあちゃん頭がだめになっちゃったか

ら。すぐに忘れちゃうの。」

と祖母は悲しそうに言いました。私は祖母にかけ言葉が見つかりませんでした。祖母が一番辛いのに、記憶を失くしていく自分が怖いのに。私の一言で祖母を傷つけてしまったことを、とても後悔しました。

その日から、祖母に少しでも笑顔になつて貰おうと、幸せと感ぜられる時間を多く作るために、一緒にテレビを見て感想を言い合うなど、たくさんお話ししました。

そんなある日、祖母と一緒におやつを食べていると、私の顔をじつと見つめながら

「お姉ちゃんは優しいねえ。おばあちゃん、お孫ちゃんとお話できて嬉しいよ。」

と祖母はにこやかに言いました。私は涙を堪え、「おいしいね。」とおやつを頬張りながら祖母の手を握りました。名前は忘れてしまつても、「孫」ということを覚えていてくれた。そんな些細なことがとても嬉しくて、幸せでした。

認知症は、とても辛い病気です。覚えていきたいの

に忘れてしまう。大切な記憶が抜け落ちてしまう。そんな恐怖と一人で戦うのはもつと辛いです。だからこそ周囲の人が寄り添い、「大切な記憶」を本人が心に留めておくことができなくても、「あなたのことを私たちは忘れない。」と伝え続けることが何よりも大事なことだと私は思います。

最後に、認知症の方々を支えていく取り組みとして、安中市でも「認知症サポーター養成講座」というものがあります。認知症サポーターとは、認知症についての正しい知識を習得し認知症の人や家族を支えていく応援者のことを指します。認知症は誰もがなる可能性のある疾患です。祖母も徘徊から行方不明になり、地域の方の保護によって命を守ることができました。だからこそ、たくさんの手によって安心して暮らせる地域社会の構築に皆さんの力が必要です。私達の優しさで、地域を「心地の良い居場所」にしていきましょう。